

植物防疫講座

病害編-63

イチジクに発生する病害の生態と防除について

愛知県農業総合試験場
 田中 はるか・石井 直樹・
 荒川 みずほ・間下 なぎさ

はじめに

イチジクに発生する病害（センチュウや生理障害を除く）として、35の病名が日本植物病名目録（日本植物病理学会，2025）に記載されている。その内訳は糸状菌27，細菌1，ウイルス2，国内での病原未確認5であり，ほとんどが糸状菌性病害である。

愛知県では，1970年ごろから水田転換によるイチジク栽培が盛んになった。2021年現在では栽培面積116ha（全国1位），収穫量約1,700t（全国2位）と，全国有数の産地である。主要品種は‘榊井ドーフィン’および‘サマーレッド’，樹形は一文字仕立てが主流である。出荷の多い時期は，施設では5～7月，露地では8～10月である。主要産地は，安城市を中心とした西三河地域と常滑市をはじめとした知多地域であるが，近年は，豊田市や渥美半島でも生産が増加している。

イチジク栽培で重要な病害として，疫病，株枯病，黒かび病，酵母腐敗病，さび病がある。その中で果実に腐敗を生じる主な病害は疫病，黒かび病，酵母腐敗病，そのほかに炭疽病等である。全身が萎凋・枯死する症状は，愛知県で初めて国内の発生が確認された株枯病のほか，疫病でも生じることがある。また，さび病は，葉に病斑を生じ多発時には落葉し果実の肥大を阻害する。

以下，各病害の症状および発生生態と，それに基づく防除対策について述べる。

I 疫 病

1 症状

主に果実に発生するほか，葉，新梢，主幹にも発生が見られる。果実では，はじめ表面が暗緑色から暗紫色の水浸状，進展すると白色粉状のかびが生じ，果実全面に広がるとミイラ果となる（図-1）。多湿条件下では軟化腐敗して落果する。葉や新梢は暗緑色から黒色に変色

し，新芽が枯死することがある（図-2）。立ち枯れタイプでは，主幹地際部に暗緑色から黒色のシミ状の病斑が生じて地下部へと広がっていき，地下部の幹の表皮が軟化・腐敗し，さらには根が細根まで溶解して枯死に至る（外側ら，1999；武山ら，2018）。

2 発生生態

病原菌：*Phytophthora palmivora* (E.J. Butler) E.J. Butler
 卵菌類に属し，果実の表面でよく遊走子のうを生じる。本菌は，土壤に混じった病果や病葉の中で厚膜胞子の



図-1 疫病の被害果
 上：暗緑色の水浸状の斑点（初期症状）。
 下：果面に広がった白色粉状の遊走子のう。

Ecology and Control of Fig Diseases. By Haruka TANAKA, Naoki ISHII, Mizuho ARAKAWA and Nagisa MASHITA
 （キーワード：イチジク，病害，発生生態，防除）